

成功恐怖概念の検討と測定尺度の作成

筑波大学大学院(博)心理学研究科 岡島京子・桜井茂男

筑波大学心理学系 勝倉孝治

An examination of the fear-of-success notions and construction of the Fear of Success Scale

Kyoko Okajima, Shigeo Sakurai and Takaharu Katsukura (*Institute of Psychology, University of Tsukuba Ibaraki 305*)

The notion of the fear of success proposed by Pappo (1972) and Cohen (1974) was reviewed. The fear of success is a kind of neurotic fear psychodynamically originated in childhood when the parents have some neurotic fear that their child might exceed them or separate from them. Their fear is unconsciously transmitted to their child, hence the child comes to feel fear about achievement or success. Although this is a competition between the child and his/her parents, the fear of success is likely to occur in competitive situation in general. From this view point, the Fear of Success Scale was constructed to identify success-fearers. The scale contains 40 items in a yes-no format. A total of 195 undergraduates completed it and the scale was found to have high reliability.

Key words : fear of success, motive to avoid success, Oedipal complex, competitive situation, Fear of Success Scale, correlational analysis.

問 題

1968年、米国ミンガン大学のHornerが、女性特有の動機として成功回避動機(motive to avoid success)あるいは成功恐怖(fear of success)の存在を指摘して以来、達成動機研究の枠組において、多くの研究が行われてきた。Hornerは、女性の達成行動の予測が困難であるという事実を説明するために、成功恐怖の概念を導入したのである。すなわち、女性には一般に知的側面で成功したいという達成動機と、その知的達成によって社会的ステレオタイプから逸脱し、社会から拒絶されるのではないかとこの恐れや不安があると考え、この恐れや不安を成功恐怖あるいは成功回避動機と命名したのである。

しかし、その後の研究によって、様々な反証結果があげられている。青柳(1982)はこの種の研究における一貫性の欠如の理由を、①測定方法に関する問題、②性差に関する問題、③他の心理学的諸変数との関連、の3点にまとめている。測定方法の問題としては、被験者の性よりも尺度の刺激手掛りの性すなわち、提示される達成物語の主人公が女性であるか男性であるかの方が重要な要因となるのではないかと、また成功回避物語の判定が曖昧で主観的ではないかという点が指摘されている。性差について

は、従来多くの研究で一貫して差がみられるとは限らないという問題があげられる。性差がみられない場合には、男性にも成功回避動機の存在が認められるとされた。しかし、作られた物語の内容は、成功に対する社会的拒絶への不安ではなく、成功そのものに価値を置かず懐疑的にうけとめているというものであり、女性のものとはかなり質の異なるものであった。このように、男性の場合、成功を恐れて回避するのではないとすれば、成功恐怖と同義に扱われるHornerの成功回避動機の概念によっては解釈しえないものといえよう。さらに、他の心理学的変数との関連の主なものとしては、性役割志向および達成動機との関連が報告されている。しかし、いずれも一貫した結果が得られていない。以上のことから、青柳は、Hornerとは異なる成功回避動機の概念規定の必要性を示唆している。

一方、Pappo(1972)、Cohen(1974)、Canavan-Gampert, Garner, & Gumpert(1978)は、成功回避動機の存在が1915年にFreudによって、またその後、Horney(1936,1937)、Sullivan(1953)などの新フロイト派の研究者らによって、いくつかの臨床例とともに示されていることを指摘し、Hornerとは異なる臨床的立場から成功恐怖を規定し、それを解明しようとしている。Pappoは学習場面につい

て、Cohenはそれを含む多様な場面について、成功恐怖測定尺度を構成した。Canavan-Gumpert, et al.はそれらの信頼性、妥当性を検証するための一連の実験的検討を行い、そのようなアプローチが成功恐怖という広く一般に認められるパーソナリティ特性の解明に糸口を与えるものであるとしている。

本研究は、臨床的立場からの成功恐怖概念を検討し、Pappo, Cohenの尺度を参考にして、成功恐怖測定尺度を作成することを目的とする。

成功恐怖概念の検討

臨床領域の文献では、成功恐怖の起源について、関連はするが若干異なる2つの考え方があり、それらはFreud, Horney, Cohenらの考え方と、Sullivan, Pappoらの考え方である。以下、各々の理論について概観し、両者を統合して考えるCanavan-Gumpert, et al.の立場を検討してみよう。

成功恐怖という心理的現象は、1915年にFreudによって記述されて以来、神経症の問題として多くの心理臨床家の注目を集めてきた。しかし、その際、成功恐怖はごくまれな例として示され、その他の自己防衛的(self-defeating)兆候と分離された特別なトピックとして取り上げられることはなかった。

Freudの理論において成功恐怖を解明する鍵はエディプス葛藤である。Freudが示したリビドーの発達段階によれば、エディプス期は3～5歳とされる。幼児はその時期に近親相姦願望をもち、異性の親に対して性的思慕および自分だけが異性の親に愛されたいという願望を抱く。同時に、その願望を阻止すると思われる者(通常、同性の親や同胞)を破壊しようとする願望をもつが、そういった願望は去勢コンプレックスや愛の喪失不安をひき起こす。これがエディプス葛藤と呼ばれるものである。幼児はこのエディプス葛藤を消滅させようとして、両親の道徳的、禁止的側面を同一化し、その結果、超自我が形成される。Freudによれば、このアンビバレントな性衝動とその行動化に対する不安から生じるエディプス葛藤が、成功恐怖の起源であるとされる。

さらに新フロイト派と呼ばれるHorneyは、以上のような発達初期の影響に加えて文化的影響も成功恐怖の発達において大きな役割を果たすと考え、次のような文化的特性を示した。すなわち、

- ① 我々の社会は競争的で個人的な精神に支配されている。
- ② 非現実的でポジティブな一連の特性(コンピテンス、勇気、冒険心)を成功する人々に、またネガティブな一連の特性(無価値、無能力、怠惰)を失敗する人々に付与しようとする。

- ③ 社会的で道徳的な特性(慎み深さ、非利己的、自己犠牲)が重視される。

Horneyは以上のような文化的特性に象徴される望ましくない児童期初期の環境が、強い不全感、敵意、不安といった感情を生むと推論している。成功恐怖をもつ神経症的人々には、成功を、愛や賞賛をもたらすものではなく、それを欲するライバルの敵意を増大させるものとして知覚する。したがって、成功に接近した時、それに逆い、そこから遠ざかる傾向を生じ、成功した場合にもそれを喜ばないし、自らの経験として感じないという。CohenはFreud, Horneyの上述の考え方にに基づき、エディプス葛藤に基づく競争を重視しながら、成功恐怖を特定の活動領域に限定することなしに、より広く般化すると考えた。Cohenによれば、親は子どもの成長を願い、自立やコンピテンスを獲得しようとする衝動を励ます反面、子どもを依存的にしておきたいという要求や子どもが親の達成をしのぐであろうという恐怖もっている。子どもが実際、成功しそうになると、そういったアンビバレンスに基づき不安や怒りが喚起され、親は子どもに成功が好ましくないというメッセージを与える。そこで子どもは混乱し、達成や自立へと努力はするが目標が接近した時、ひどく沈んだ感情を経験し、成功を回避することによってその感情を静めようとするのである。Cohenは親が子どもに、成功に関する好ましくないメッセージを与えることによって成功恐怖は発達し、特にエディプス期において、子どもは親の禁止令を最も強く感じると考えた。その際、子どもは自分のどういった達成行動が親の不安を喚起するのか識別することができないので、いかなる自己主張や成功をも無意識的に、攻撃的あるいは露出症的衝動と同等視し、罪悪感、不満に満たされてしまうと考えたのである。

臨床的立場のもうひとつの考え方は、Sullivan, Pappoの系列である。Sullivanは成功恐怖について直接的な言及はしていない。Sullivanによれば、子どもにとって最も強い動機あるいは要求は安全であると感じることであり、母親が子どもに対してポジティブである時、子どもは安全感をもち、他の活動へ自由に参加できるとされる。SullivanはFreudやHorneyのように子どもと親、あるいは子どもと同胞との競争(特にエディプス期における)を重視するのではなく、子どもの分離一身体化(separation-individuation)の葛藤に焦点をあてる。つまり、熟達や自立に到達しようとする子どもの努力が、親からの否定的反応に合う時、葛藤が生み出されると考える。

同様に、Pappoも子どもの技能獲得や独立に対す

る親の神経症的不安が子どもの不安を喚起し、それを低減させるために一連の防衛機制が生じると考える。その一環として、成功恐怖は親の否定的反応を受ける特定領域に限って発達するとしていることが、前述した Cohen と異なる点である。

Canavan-Gumpert, et al. は前述した2つの考え方の統合をはかった。すなわち、子どもの分離—個体化の葛藤であろうがエディプス葛藤であろうが、この種の葛藤には子どもと親のどちらが子どもの行動の支配権をにぎるかという競争が含まれていると考える。また、分離—個体化の葛藤はエディプス期以前に生じうるとして、発達のごく初期の家庭内における経験を重視している。とすれば、分離—個体化の葛藤とエディプス葛藤の出現には、時間的なズレがあるが、両葛藤は競争を本質としている点で相違ないといえる。

また、Canavan-Gumpert, et al. は、成功恐怖をもつ人が失敗回避動機、達成動機、成功回避動機の3種の達成関連動機をもっているとし、そのいずれが支配的であるかを決定する主要因として、個人的変数よりも状況の変数を重視する。すなわち、成功を恐れる人は、成功へつながら活動を全く避けてしまうのではなく、またいつも同程度に成功する可能性を妨害してしまうのでもないと考え、葛藤場面における行動に関して、次のような仮説を立てている。

- ①. 成功および失敗の両方から適度に離れている時は、成功へと熱心に努力する。
- ②. 成功に接近するにつれて一層、成功への努力がなされる。
- ③. 成功へさらに接近し始めると、不安が喚起され始め、成功についてアンビバレントな兆候が示されるようになる。
- ④. その成功に関連する活動から離れてしまうと、成功あるいはそれに代わるものに向って、再びエネルギーな努力が開始される。

また、成功恐怖をもつ者が実際に成功した場合とか成功を目前にした場合には、自分のコンピテンスの否定に夢中になり、自らの成功を否定することによって、ポジティブな成功経験から心理的に逃れ、不安を低減させようとする。

Canavan-Gumpert, et al. は、成功恐怖をもつ者の特徴として以下の4点を指摘している。

- ①. 自尊心が低く、不安定である。
- ②. 評価されることおよび競争に含まれる競争的な意味に夢中になる。
- ③. 自己の達成を説明する際、幸福や他者の援助といった外的要因をあげて自らのコンピテンスを否定する傾向をもつ。

- ④. 成功に接近すると、成功に対して不安傾向を強め、成功を妨害する傾向をもつ。

Canavan-Gumpert, et al. は、臨床的立場からの成功恐怖の概念が、Horner の概念規定とはかなり質の異なるものであると述べているが、具体的な相違点は記されていない。しかし、成功恐怖の起源を発達のごく初期に認めていること、また性差を仮定しないこと、および3種の達成関連動機のダイナミックスの決定要因として個人的要因よりも状況的要因を重視していることなどが、顕著な相違点と言えよう。Horner による概念規定が問い直されている今日、このような臨床的立場に基づく考え方は成功恐怖研究に新たな方向を与えるものと思われる。

以下、Pappo および Cohen による成功恐怖測定尺度を、わが国の社会文化的状況に照らし合わせて再構成し、その信頼性を検討する。

測定尺度の作成

Canavan-Gumpert, et al. は、成功恐怖についての Pappo および Cohen の研究を詳細に検討した。それは、次のように要約される。

Pappo は、Sullivan を代表とする臨床的な理論や、彼女自身の臨床経験にもとづき、成功恐怖をもつと思われる人の特性として、次の4点を指摘した。すなわち、①評価や競争に敏感であること、②コンピテンスを否定する傾向があること、③自己疑惑と否定的自己評価をすること、④成功が近づくと、自己妨害行動をとること。彼女は、これらの特性が、主に学習場面で顕現すると考えて、質問紙を作成した。それをういた一連の研究により、質問紙の信頼性、妥当性が認められた。

他方、Cohen は、成功恐怖者 (success fearer) を、達成とコンピテンスを攻撃的あるいは(また)露出症的衝動と無意識的に同一視することにより、自己向上行動を阻止している者、と規定した。彼女は、成功恐怖を一般的な人格特性としてとらえた。したがって、Pappo のように質問項目を学習場面に限定することなく、多様な生活場面から抽出して、尺度を構成した。大学生を対象に実施した結果、この尺度と Pappo 尺度との間に、 $r = .74$ ($p < .001$) という有意な相関が認められた。一連の研究結果により、尺度の信頼性、妥当性は確認された。

Pappo と Cohen の両質問紙とも、因子分析の結果、Pappo の指摘した4特性を含む数因子が、それぞれ抽出された。しかし、上述のように、Pappo は、成功恐怖を状況の変数として、他方、Cohen は人格の変数として、とらえている点に相違が認められる。これは、成功恐怖の発達に関する考え方の違いにも

とづいており、今後の検討が必要と考えられる。

以上の研究結果にもとづき、我々は、①日本における成功恐怖を検討するため、および②成功恐怖概念をさらに吟味し、類似概念との同異点を明確にするために、日本語版成功恐怖測定尺度の作成を試みた。

(1) 尺度の構成

被験者 筑波大学生 194 名 (男子 99 名, 女子 96 名)。彼らは、「幼児・児童心理学」の受講者であり、129 名が 1 年生であった。

手続き Pappo 尺度 84 項目と Cohen 尺度 64 項目、合計 148 項目をなるべく忠実に日本語訳し、重複するものを削った。これを原案として、5 名の心理学専攻の大学院学生が、日本語としての表現を含めて検討し、不適切な項目は削除された。特に、1 つの項目に 2 つ以上の内容を含み回答しにくい項目、文化的な差異により日本では一般的でない内容を含む項目、成功恐怖を表現しているのか否か明らかでない項目、などは除外された。この作業の結果、87 項目が残された。87 項目のうちには、学習場面と関係の深い項目が 26 項目含まれていた。回答形式としては、「はい・いいえ」の真偽法が用いられた。成功恐怖を表現している反応に対して 1 点が与えられ、それらの得点を総計することにより、成功恐怖得点とされた。

1981 年 11 月下旬、本質問紙が、「幼児・児童心理学」を受講する学生に、集団で実施された。このデータにもとづき、尺度の内部一貫性と実施上の効率性を高める分析が行なわれ、40 項目から構成される成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale: FSS) が作成された。3 か月後、再テスト法による信頼性を検討するため、同じ学生に対して本質問紙が再び施行された。

(2) 結 果

質問紙の分析は、回答した被験者のうち、記入もれのないなかった 178 名 (男子 94 名, 女子 84 名) のデータにより行なわれた。分析は、次の 2 段階に分けて行なわれた。

第 1 分析では、総得点と各項目得点との双列相関係数が算出され、1%水準で有意な相関を示す項目が抽出された。この結果、87 項目のうち、17 項目が削られ、70 項目が残された。

第 2 分析は、さらに項目を精選し、実施上の効率性と尺度の内部一貫性を高めるために行なわれた。第 1 分析で抽出された 70 項目の総得点と各項目得点との双列相関係数が求められ、この値の最も低い

項目が 1 つ除外された。次に、同様にして、残りの 69 項目の総得点と各項目得点との双列相関係数が求められ、この値の最も低い 1 項目が除外された。この過程は繰り返し行なわれ、40 項目になったところで中止された。第 1 分析の結果残された 70 項目と、第 2 分析の結果残された 40 項目の総得点間の相関係数 (Pearson の積率相関係数) を求めたところ、 $r = .95$ であった。

Table 1 に、作成された成功恐怖測定尺度 40 項目、およびその総得点と各項目得点との双列相関係数が示されている。相関係数の正の値は、その項目に「はい」と回答した場合、成功恐怖得点として 1 点与えられる項目であることを示している。負の値は、その逆を示す。相関係数の絶対値の範囲は、.348 から .813 で、どの項目も 0.1%水準で有意である。本尺度中、学習場面と関係の深い項目は、「4. ある課題にとりかかろうとすると、他のことに注意がそれてしまう」、「6. なかなか解けない問題にであったとき、解けるまでがんばる」などの他、番号順に 7, 10, 14, 20, 21, 26, 30, 34, 38, 39 の 12 項目である。これは、40 項目全体の 30%であり、最初の 87 項目中に占められた割合と等しい。

Fig. 1 には、成功恐怖測定尺度の度数分布が示されている。この図によって、成功恐怖得点が、ほぼ正規分布していることが知られるであろう。本尺度の可能な得点範囲は、0 点から 40 点であるが、実際には、2 点から 36 点であった。全体平均は、17.70、SD は、7.88 であった。Kuder-Richardson の第 20 公式によって、内部一貫性が検討された。その結果、 $r = .89$ という高い一貫性が認められた。この値は、Pappo 尺度、Cohen 尺度とほぼ等しい。さらに、3 か月後に実施された再テストでは、 $r = .84$ ($N = 85$)

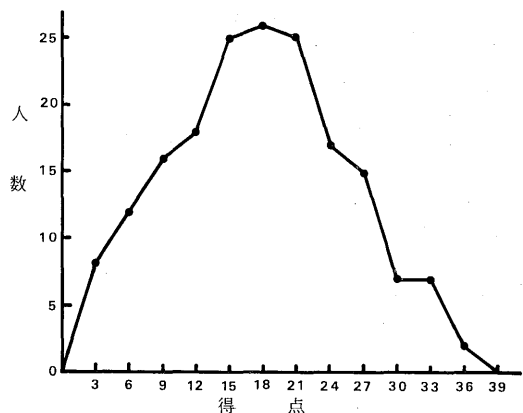


Fig. 1 成功恐怖測定尺度の得点分布

Table 1 成功恐怖測定尺度, およびその総得点と各項目得点の双列相関係数

No	項 目	双列相関係数
1.	誰か、はげましてくれる人がいないと、しようと思っていることもなしとげられない。	. 515
2.	集団の中で、注目の的になることは、不安である。	. 513
3.	約束はするが、実行することは、むずかしい。	. 414
4.	ある課題にとりかかろうとすると、他のことに注意がそれてしまう。	. 605
5.	わびる必要もないのに、わびてしまう。	. 366
6.	なかなか解けない問題にであったとき、解けるまでがんばる。	- . 458
7.	勉強や仕事に、たやすく集中できる。	- . 658
8.	多くの人は、他人の不幸を内心で喜んでいると思う。	. 474
9.	誤解されないかと、心配することが多い。	. 506
10.	子どものころ、先生にあてられると、正しい答えを知っていても、いつも強い不安におそわれた。	. 596
11.	ときどき、友だちでも会いたくなくて、避けることがある。	. 436
12.	友だちが成功すると、自分が競争に負けたような気がする。	. 369
13.	長い時間、ひとつのことに集中できる。	- . 536
14.	私には、誰にも負けない得意な教科がある。	- . 430
15.	良いことがあると、次に悪いことがあるのではないかと、気になる。	. 430
16.	なんでもやりとげる自信がある。	- . 504
17.	大切なことをなしとげたとき、心から満足できる。	- . 461
18.	権利を主張しにくい。	. 348
19.	衝突を避けるために、妥協しやすい。	. 398
20.	ふと気がつくとき、少しも話を聞いていないことが、しばしばある。	. 491
21.	勉強しているとき、時間ばかり気にかかる。	. 409
22.	知らない人の前では、いつもの自分のように、ふるまいにくい。	. 507
23.	決断したあとでも、そのことについて、いつまでもこだわっている。	. 634
24.	会合に招かれると、自分がそこにふさわしくないのではないかと、気になる。	. 633
25.	仕事はぎりぎりまでやらないので、できることでもやれないことが多い。	. 518
26.	はじめは、仕事や勉強に熱中するが、すぐ飽きてしまう。	. 587
27.	仕事がうまくはこんでいるとき、人に注目されると、やりにくくなる。	. 576
28.	重要な仕事をなしとげても、充実感が感じられない。	. 813
29.	自分で決めた水準に、到達できないことが多い。	. 636
30.	成績が良いと、運が良かったためか、先生の思いがちのためだ、と思うことがある。	. 432
31.	仕事がうまくいきすぎると、こわくなる。	. 476
32.	私は、自分のしたい仕事をしている。	- . 623
33.	ゲームに勝ったとき、相手が不注意だったからだ、と思うことがよくある。	. 507
34.	自分の考えを、あらかじめ教師や友だちに確かめてもらわないと、レポートが書けない。	. 531
35.	ゲームで勝ちそうになると、他のことを考えはじめる。	. 561
36.	大切な仕事を、なしとげられないことがある。	. 539
37.	一目置いている友だちから仕事をほめられると、いい気分にもなるが、不安にもなる。	. 476
38.	どんな仕事や勉強が一番興味があるのか、よくわからない。	. 577
39.	やり終えてしまった課題には、もう価値がないように思える。	. 465
40.	大切なしめ切りがせまってくると、いらいらして仕事に集中できなくなる。	. 547

という高い信頼性係数が得られた。

(3) 考 察

質問紙の分析結果から、本成功恐怖測定尺度は、研究への適用に十分耐えうる有効な尺度であることが示された。最初の87項目から第1分析により17項目が除外され、70項目が残された。また、70項目から40項目に精選された第2分析でも、両尺度間の相関係数は、.95であった。以上の2つの結果は、内部一貫性を Kuder-Richardson の第20公式で検討するまでもなく、本質問紙が最初から非常に一貫性の高い、安定した尺度であることを示唆しているように思われる。

Pappo は、成功恐怖を学習場面に限定して、質問紙を作成した。他方、Cohen は、一般的な人格特性と考えて、多様な生活場面から質問項目を集め、質問紙を構成した。両尺度間の相関は、 $r = .74$ ($P < .001$)であり、成功恐怖が人格特性であることを示唆している。本研究でも、最初の87項目のうちに、学習場面に関係する項目が30%含まれていた。また、精選された40項目にも、同率だけ含まれていた。これらの結果から、成功恐怖が人格特性であるとは結論づけられないとしても、少なくとも、学習場面に限られた現象ではない、ということが指摘できるように思われる。今後、本尺度をいろいろな状況、たとえば、試験前と試験後などで実施して、成功恐怖が状況の変数なのか、人格の変数なのか、吟味していく必要がある。

Table 1 をみると、40項目の中には、対人場面に関する記述の多いことに気づくであろう。それが顕著な項目をひろってみると、「2. 集団の中で、注目的になることは、不安である」をはじめとして、番号順に、12, 19, 22, 27, 33, 37の項目があげられる。このことは、対人関係での不安、すなわち親和不安を示しているようにも思える。この他に、「1. 誰か、はげましてくれる人がいないと、しよつと思っっていることもなしとげられない」というように、自尊感情 (self-esteem) と関連しているように思われるような項目も認められる。これらの点を考慮すると、成功恐怖の概念をさらに明確にするために、類似概念、特に、親和不安、自尊感情、達成動機、失敗回避動機、Horner (1974) の提唱した成功回避動機など、との比較検討が必要であるように思われる。なお、尺度の因子分析をすることも、概念分析のために有益と思われる。

また、本尺度とパフォーマンスとの関連を検討するための研究が必要であろう。Cohen が強調している、競争場面での成功恐怖現象の顕現という予測は、

実験的検討に値すると思われる。

成功恐怖は、部分的には、無意識過程の産物である、と考えられている。この点からすれば、本尺度は、質問紙という意識レベルでの測定であり、現象を十分測定しているとは言えないかもしれない。今後、この無意識過程をよりよく反映する測定法を、考案する必要がある。

要 約

Pappo (1972), Cohen (1974) は、精神分析の観点から成功恐怖の概念を提唱した。その定義によれば、成功恐怖とは、幼児期に起源をもつ一種の神経症的不安である。子どもが親をしのぐであろう、あるいは親から独立してしまおうと考えることによって生じる親の神経症的不安が、無意識的に子どもに伝達され、結果的に、子どもが達成や成功を恐れるようになる。この過程は、親子間の競争を含んでいるので、成功恐怖は競争場面において生じやすい。我々は成功恐怖をもつ者を同定する成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale : FSS) を構成した。この質問紙は、「はい・いいえ」の真偽法で40項目から成る。195人の大学生に施行し、尺度の内部一貫性と信頼性をみた。Kuder-Richardson の第20公式によって $r = .89$ という高い一貫性が認められ、さらに3か月後に実施された再テストでは $r = .84$ ($N = 85$) という高い信頼性係数が得られた。

文 献

- 青柳肇 1981 成功回避動機 の概念と問題点 日本心理学会第45回大会発表論文集, S8.
- Canavan-Gumpert, D., Garner, K., & Gumpert, P. 1978 *The success-fearing personality*. D.C. Heath.
- Cohen, N. E. 1974 Explorations in the fear of success. Unpublished doctoral dissertation, Columbia University.
- Horner, M. S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Horner, M. S. 1974 The measurement and behavioral implications of fear of success in women. In J.W. Atkinson & J.O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement*. V. H. Winston and sons.
- Horney, K. 1936 Culture and neurosis. *American Sociological Review*, 1, 221-230.
- Horney, K. 1937 *The neurotic personality of our*

- time*. W.W. Norton.
- Freud, S. 1915 Some character-types met with in psychoanalytic work. In E. Jones (Ed.) *Sigmund Freud: Collected papers*, Vol. IV. Basic Books.
- 加藤千佐子 1977 成功回避動機に関する研究の動向 日本女子大学家政学部紀要, **24**, 9-14.
- Pappo, M. 1972 Fear of success: A theoretical analysis and the construction and validation of a measuring instrument. Unpublished doctoral dissertation, Columbia University.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. W. W. Norton.
- 1982. 9. 30 受稿 —